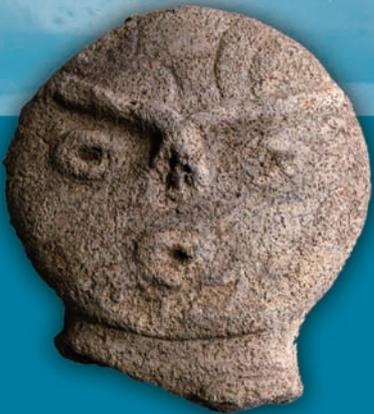


平成26年度特別企画展

# よみがえる

# 縄文の美

— 五月女范遺跡の世界 —



## ○開催にあたって

五所川原市は歴史文化遺産を多く有しています。このたび縄文時代後期から晩期の大規模な環状土坑墓群が発見された五月女菴遺跡の魅力や価値を紹介するため、特別企画展「よみがえる縄文の美—五月女菴遺跡の世界—」を開催いたします。

発掘された土器や石器などの優品の数々を多数展示しておりますので、この機会に五所川原市の文化財、縄文文化をより身近なものに感じていただきたく、皆様のご来場をお待ちしております。

五所川原市・五所川原市教育委員会

注1. この冊子は、平成26年9月5日（金）から11月3日（月）に五所川原市「立佞武多の館」2階の美術展示ギャラリーで開催する特別企画展「よみがえる縄文の美—五月女菴遺跡の世界—」の展示図録です。

注2. 本書には展示資料のすべてを掲載しているわけではありません。

注3. 時期の表示のないものは、すべて縄文時代晩期のものです。



◎五月女菴遺跡の位置

## ◎五月女菴遺跡とは？

～砂丘下に眠る亀ヶ岡文化の墓域・送り場～

### 1. 立地と環境

五月女菴遺跡は津軽半島西海岸の岩木川河口に広がる十三湖北岸にあります。十三湖は西側で日本海に通じていることから、海水と淡水が混じりあった汽水湖となり、全国有数のヤマトシジミの漁獲量を誇っています。遺跡周辺は冬季の季節風と同じ方向に延びる縦列砂丘じゅうれつさきゅうが発達し、厚い砂丘砂が堆積する立地環境にありました。遺構や遺物は、砂丘の形成休止期を示すクロスナ層中に認められ、それらは新期（平安時代以降に堆積）の最大3mに及ぶ砂丘砂に厚く覆われてパッキされていたことから、盗掘を受けながらも遺跡が極めて良好に残されていることが判明しました。

また、季節風の影響を受けて、地表面に表れた土器や石器などはすべて磨滅している状況でした。

なお、五月女菴の「そとめ」とは、津軽の方言でアヤメ科の植物を指します。かつて一帯にはアヤメの群落が咲き誇る低湿地だったことに由来します。



◎飛砂層を剥ぎ、砂丘下から発見された遺跡



◎飛砂層を剥ぐと磨滅した土器等が現れる

## 2. 調査の経緯

平成22年度から平成24年度にかけて土砂採取工事に伴う緊急発掘の結果、縄文時代のマウンドを伴う土坑墓群が出現し、さらに土坑墓群が大規模な環状に巡ることが明らかとなり、注目を集めました。その後、遺跡の保存運動がおこり、平成25年度には保存目的の範囲確認調査に切り替わり、調査が行われました。

## 3. 年代

遺跡は縄文後期後葉から晩期後葉（十腰内V式～大洞A式）、奈良時代（8世紀）、平安時代（10世紀前半）の複合遺跡ですが、その多くは縄文時代晩期の亀ヶ岡文化が中心です。

縄文時代の後期後葉（約3,500年前）から土坑墓が造られ始め、晩期後葉（約2,500年前）までの約1,000年間にわたって連綿と造り続けられていました。

## 4. 土坑墓の認定について

土坑墓とした遺構には、次のようなものがあります。①埋葬人骨が伴うもの。または人の歯が出土したもの。②土坑上部に黄色粘土を盛って、マウンドを造り出しているもの。③墓標とみられる大きな自然礫を伴うもの。④土坑の底面に周溝を巡らすもの。⑤内部に赤色顔料（酸化第二鉄・ベンガラ）を伴うもの。特に土坑全体が赤色顔料で覆われていたものもある。⑥子供用の墓とみられ

る埋設土器（土器棺）があるもの。⑦副葬品とみられる遺物を伴うもの。特に玉類や耳飾りなどの装身具のほか、小型の壺形土器、サメ歯を伴うもの。⑧平面の形態が楕円形（隅丸方形も含む）のもの。

以上、これらに該当するものを土坑墓と判断しましたが、これまでに約170基が確認されています。

## 5. 土坑墓の分布

現在までのところ、墓域は大きく4ヶ所に分かれて確認されています（I～IV群）。そのうち最大規模を有する土坑墓I群は、丘陵頂部を囲むように環状あるいは馬蹄形状に巡ることが判明しています。南北40m×東西60mの範囲で広がっていたものと推定され、縄文人の思考や世界観を表現したものと思われる。

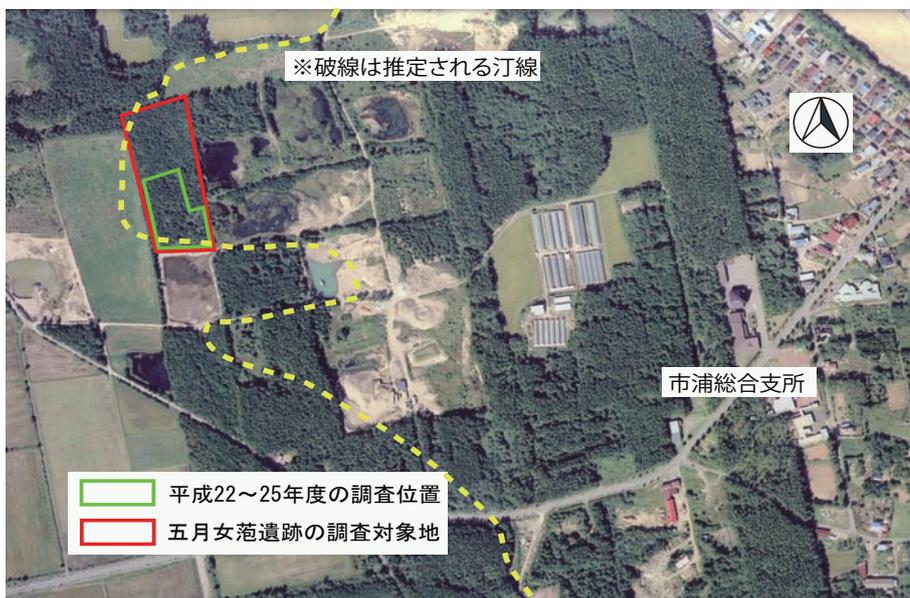
また、先述したとおり、黄色粘土を盛ったマウンドを伴う土坑墓の事例が多く確認されており、墓の上部構造が非常に良く分かっています。これは亀ヶ岡文化の、ひいては縄文文化の墓地景観に対する見方を大きく変える発見です。

## 6. 墓域を構成する主な遺構

五月女菴遺跡の墓域には、これまでに掘立柱建物跡、柵木列跡、墓域に至る道路跡、土偶や石棒など性象徴・祭祀遺物を多く伴う集石遺構、貝塚を含む捨て場など、祭祀施設を構成するさまざま

な要素の遺構が見つかり、縄文晩期・亀ヶ岡文化の集団墓地の様相が序々に明らかになってきました。この世で役割を終えた死者や道具類をあの世に送り、再生を願った送り場・祭祀場であったと考えられます。

今後、土坑墓などの遺構や出土遺物を分析することで縄文晩期・亀ヶ岡文化の社会構造の解明につながることを期待できます。



◎五月女菴遺跡の上空写真



◎平安時代の畑跡



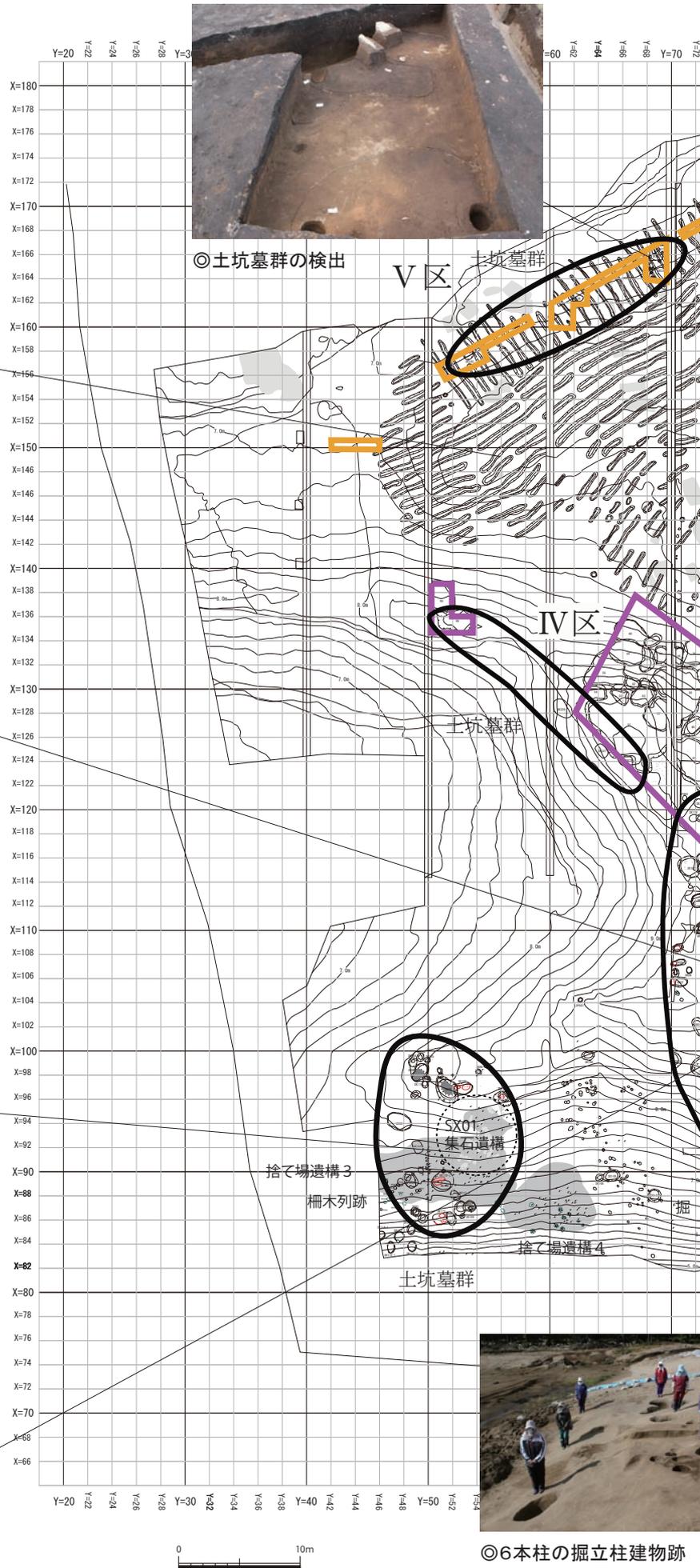
◎土坑墓・ベンガラ検出



◎集石遺構



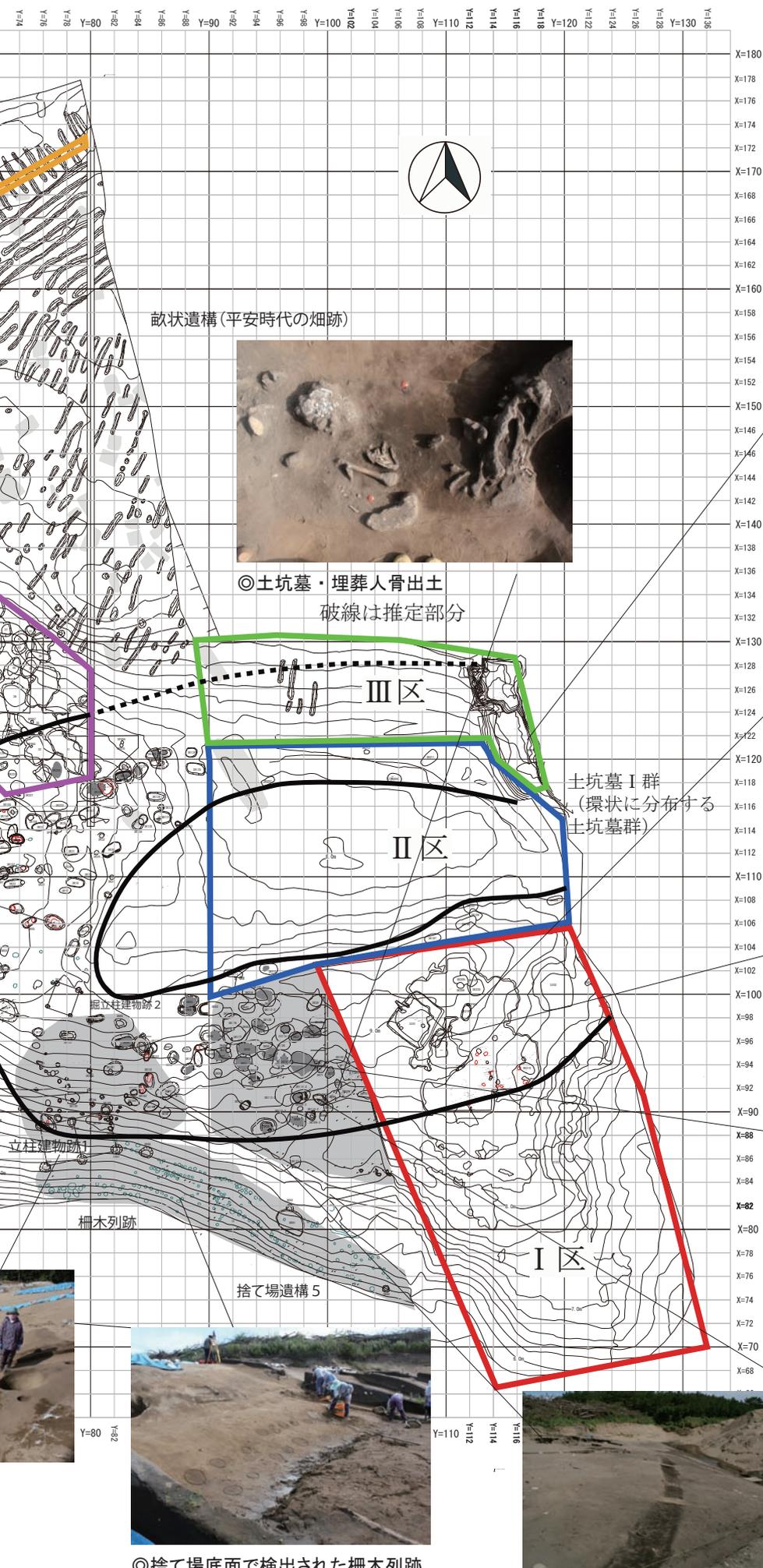
◎土坑墓・埋葬人骨出土



◎土坑墓群の検出

◎6本柱の掘立柱建物跡

◎五月女菴遺跡 全体平面図と主な遺構配置  
 (※色枠の範囲は平成25年度の調査区を示す。)



◎捨て場・貝塚



◎土坑墓・人骨出土



◎土坑墓・人骨出土



◎マウンド状に残る土坑墓群



◎土坑墓・頭骨出土



◎捨て場底面で検出された柵木列跡



◎道路跡

## ○捨て場～食住の痕跡～

捨て場とは、壊れたり、使わなくなった道具類（土器・石器・剥片）、残土・灰・焼土、貝殻・獣骨などの食べカスが、所定の場所を決めて継続的に捨てられた場所です。丘陵の緩斜面に6ヶ所ほど確認されています。

また、捨て場は土坑墓群と重なるように分布しており、死者を埋葬する場、あの世へ送る儀礼が行われた場所でした。

丘陵の北側緩斜面では、最深で約1mに及ぶ捨て場が堆積し、貝塚を形成していました。貝塚からは獣骨・魚骨などの自然遺物や骨角器など亀ヶ岡文化を解明する貴重な遺物が多く含まれており、まさにタイムカプセルといえます。



◎捨て場に廃棄された完形土器



◎敷き詰めたように廃棄された土器



◎ヤマトシジミの貝殻を含む捨て場

## ○集石遺構～祭祀具からみるくらし～

調査区西側の丘陵緩斜面から直径約5.5mの範囲に、大きいもので長さ50cmほどの自然礫や石皿、小さいもので拳大ほどのくぼみ石やくびれ石や雨だれ石と呼ばれる奇抜な形をした自然礫のほか、破損した石棒や土偶など祭祀具が多数出土しました。このように使用に耐えなくなった土偶・石棒などを周辺に住む人々が持ち寄って、送り儀礼や祭祀を行ったものではないかと考えられます。時期は縄文晩期中葉です。

なお、集石遺構の下層からは、捨て場や土坑墓も見つかっています。



◎集石遺構の検出状況



◎緩斜面に造られた集石遺構



◎集石遺構から出土したくびれ石（左上）・雨だれ石（左下）  
・石棒（右上）・くぼみ石（右下）

## ○葬送～死者を送る～

縄文人は亡くなると、地面に穴を掘り、埋葬されました。五月女范遺跡では、これまで約170基の土坑墓が見つっています。保存状態もよかったため、埋葬人骨や墓のマウンドや自然石を用いた墓標もそのまま見つかった例があります。副葬品にはペンダントやネックレスに利用した玉類、石鏃、サメ歯があります。

また、ベンガラ（赤色顔料）を含むものがあり、死者に塗布していたものと思われます。さらに子供の墓には埋設土器（土器棺）が利用されました。



◎黄色粘土のマウンドを伴う土坑墓の検出



◎マウンドを伴う土坑墓を断ち割った様子



◎土坑墓の検出



◎墓石を伴う土坑墓



◎黄色粘土のマウンドを伴う土坑墓



◎黄色粘土のマウンド・墓石を伴う土坑墓



◎土器片を敷いた土坑墓



◎マウンドを伴う土坑墓が切り合う様子



◎縄文人骨の調査



◎底面に周溝がある土坑墓



◎屈葬された縄文人



◎ベンガラ・玉類を含む土坑墓



◎屈葬された縄文人



◎子供用とみられる埋設土器（土器棺墓）



◎屈葬された縄文人

## ○祭祀と儀礼～まつる・祈る～

五月女菴遺跡からは実用的な道具のほかに、まつりや祈りに使ったと考えられる亀ヶ岡文化に特徴的な土偶、人面付土器、土面、岩偶、岩版、石棒・石刀、ミニチュア土器、人や動物をかたどったものなどが出土しています。

### 土偶

土偶の多くは乳房が表現されており、女性をかたどったものと考えられています。土偶は集石遺構や土器片と共に捨て場から出土しています。

また、ほとんどバラバラになって出土していることから、意図的に破壊されたのではないかとする意見があります。これは身体の痛みのある部分のかわりに土偶の部位を割ることで、身代わりにしたとする考えです。

しかし、土偶の破損部にアスファルトで接合・補修したものもあることから、破壊説が成り立たないという意見もあります。

土偶には亀ヶ岡文化の代表とされる遮光器土偶や抽象的なX字形土偶などさまざまな形の土偶が作られています。



◎集石遺構から出土したさまざま土偶



◎遮光器土偶



◎さまざまな土偶

## 土面

土面も土偶と同じく捨て場から多く出土し、やはり破損しています。顔の表現も土偶と共通しています。一般に顔に装着するための小さな孔があり、まつりに使用されたものと考えられます。



◎さまざまな土面（縄文晩期中葉）



◎土面（縄文晩期中葉）

## 人面付土器

大きさは幅 12cm、高さ 7cm で、顔の上半部が欠損して出土しました。遮光器（雪めがね）と呼ばれる大きな楕円形の目を持ち、鼻が立体的で、口元には刺青を思わせる刻目の表現があります。

また、顔全体にベンガラ（赤色顔料）が塗布されています。形態は浅鉢形土器そのものであり、土器の底面に顔が表現されているため、自立することはできません。したがって、まつりの際に回し飲みした祭器ではないかとする見解があります。亀ヶ岡文化の中でも異彩を放つ優品です。



◎人面付土器・正面



◎人面付土器・側面

## 岩版

渦巻き文様が彫り込まれており、お守りなどに用いられたと考えられます。



◎岩版

## 石棒・石刀

土面も土偶と同じく捨て場から出土しています。しかも土偶と同じように破損しています。



◎端部に彫刻を施す石棒（後期後葉～晩期前葉）



◎さまざまな石棒・石刀（晩期中葉）

## ミニチュア土器

土器を小型化したもので、まつりに使われたものと考えられます。



◎さまざまなミニチュア土器（晩期中葉）

## 動物形土製品

動物を模したものにイノシシ・カエルなどがみられます。



◎土器に付けられた動物



◎動物形土製品



◎動物形土製品



◎動物形土製装身具

## 異形石器

実用からかけ離れた形が多く、用途は不明ですが、宗教的な道具として捉えられています。



◎さまざまな異形石器

### ○装飾品～飾る～

装飾品としたものには、美しさだけを求めるのではなく、まじないなどの用途を想像させるものがあります。素材としては石、土、骨・歯、角などが使われています。土坑墓からは副葬品とみられる玉が多く出土しています。玉の素材には在地の緑色凝灰岩、赤彩された玉のほか、遠く離れた新潟県糸魚川産のヒスイなども使われています。

また、特異なものにサメ歯が出土した土坑墓もあります。



◎サメ歯と勾玉



◎イモガイ形土製品



◎土製耳飾り



◎ヘアピン（鹿角製）



◎土製勾玉



◎ヒスイ製玉



◎ヒスイ製勾玉



◎緑色凝灰岩製の玉



◎赤彩の玉



◎ボタン状石製品



◎石製垂飾品



◎環状土製品



◎石製垂飾品

## ○五月女菴遺跡のはじまり

～縄文時代後期後半の土器～

五月女菴遺跡は、亀ヶ岡文化の前史ともいえる縄文時代後期後半（約 3,500 年前）から始まります。土坑墓もこの時期から造られ始め、捨て場も形成されています。この頃から墓域や送り場として機能していたことが分かります。土坑墓からは北海道の鉢形土器（堂林式土器）が出土しており、北海道との繋がりが伺えます。

また、遺物では注口土器や香炉形土器などが出土しています。



◎立ち膝屈葬の人骨を伴う土坑墓  
北海道系の土器が出土（縄文後期後半）



◎土坑墓から出土した北海道系土器（堂林式土器）



◎注口土器（縄文後期）

## ○五月女菴の亀ヶ岡式土器

～さまざまな形と文様の変遷～

縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器には、大きく深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形、香炉形、注口土器など分かれ、変化に富んだ器形があります。鉢形、皿形土器には台が付くものもあります。

亀ヶ岡式土器には6型式の変遷があり、大きく三叉文、羊歯状文、雲形文などの曲線的な文様をもつ前半から、工字文、変形工字文などの直線的な文様を施す後半へと移り変わっていきます。

また、用途を想定して、粗製土器と精製土器に分かれています。粗製土器には縄文以外の装飾が少なく、煮こぼれした炭化物などが付着する実用的な土器です。一方で、精製土器はていねいに磨き上げられて、文様が描かれます。これらはまじないの意味を持ち、祭りなどに用いられたものとも考えられています。



◎柄付き鉢形土器（晩期中葉）



◎皿形土器の文様（晩期中葉）



◎皿形土器（晩期中葉）



◎粗製・深鉢形土器



◎台付鉢形土器（晩期前葉）



◎台付鉢形土器



◎台付鉢形土器



◎鉢形土器（晩期前葉）



◎鉢形土器（晩期中葉）



◎壺形土器（晩期中葉）



◎赤彩・壺形土器（晩期前葉）



◎赤彩・壺形土器（晩期前葉）



◎粗製・壺形土器



◎粗製・壺形土器



◎ベンガラの入った壺形土器



◎注口土器（晩期前葉）



◎注口土器（晩期後葉）



◎香炉形土器

## ○縄文人の生業～獲る・加工する～

五月女菴の縄文人は自然の恵みを巧みに利用し食糧を得ていたことが、貝殻を含む捨て場の出土遺物から明らかとなりました。石斧で樹木を伐採したり、弓矢や石槍を使って、シカやイノシシなどを捕獲していました。イヌの骨格も出土しており、狩犬として利用されていたものと思われます。日本海や十三湖から貝の採取のほか、骨角器を利用した漁労も活発に行われていました。

また、石皿や磨石を使って、トチノキの実を加工するなど、さまざまな方法で食糧を獲得していました。



◎磨製石斧



◎石槍



◎石篋



◎石匙（縦型）



◎石錐



◎石皿と磨石



◎捨て場で検出されたイヌの骨格



◎鍵あるいは疑似餌・骨角器（晩期中葉）



◎離頭鈎・骨角器（晩期中葉）



◎ヘラ状骨製品  
・骨角器



◎針・骨角器



◎根バサミ・骨角器

## ○特殊な石の道具～加工する・生産する～

五月女菴遺跡で出土した石の道具をみると、地元の緑色凝灰岩を使った玉類がたくさん出土します。

また、玉原石や未成品のほか、玉原石が入った壺なども出土しています。

一方で、孔を開ける材料として、メノウ製のドリルがまとめて出土しており、この一帯で玉造り生産が行われていたことが分かりました。



◎玉原石（緑色凝灰岩）が入った小壺



◎玉砥石



◎まとめて廃棄されたメノウ製ドリル

---

特別企画展図録

**よみがえる縄文の美—五月女菟遺跡の世界—**

---

2014年9月1日 発行

編集・発行 五所川原市教育委員会

〒037-0202 青森県五所川原市金木町朝日山319番地1

TEL:0173(35)2111 Fax:0173(53)2995

---